



## 70年代が今につながって…

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮地, 佳子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004886">https://doi.org/10.24729/00004886</a>

2009年度 男女共同参画事業

シンポジウム「70年代フェミニズムを検証する：

侵略＝差別と闘うアジア婦人会議の軌跡」

## 70年代が今につながって…

宮地 佳子

こんにちは。宮地佳子です。

この会があるので、「侵略＝差別と闘うアジア婦人会議」（以下「ア婦」と記す）とか、飯島愛子さんという名前を初めて聞かれた方、どのぐらいいらっしゃいますか。はい、ありがとうございます。私もあまりしゃべり慣れてないので、書いてきたものを読みながらやらさせていただきます。

去年の夏、『1968』という本が出て、全共闘運動の検証ということで、リブに一章を当てています。「ア婦」のことも少し出ているのですけれど、だいたいリブの田中美津さんのことが書いてあります。

そうしたら案の定、年末の『週刊金曜日』という雑誌で、美津さんがムチャクチャ怒って長い文章を書いていました。「ア婦」の友人もそれを見て、「女性解放を論じる進んだ男の感性は40年たっても変わらないのかな。あの時代の女の思いが何も分かっていない感じよね」と言っていました。今日は、当事者の女による検証ということなので、かえってすごく恐ろしいのですけども、聞かせていただきたいこともいろいろあるので、勇気を持ってやってきました。

### 1 資料のこと

資料についてですが、先ほど、伊田さんご紹介くださったようにパンフレット20冊を復刻合冊した資料集成全3巻、飯島さんの著書『〈侵略＝差別〉の彼方へ』、それに寄贈させていただいた会報やビラからなる資料で「ア婦」の全部の記録ということになります。寄贈した資料は、ファイ

ルで28冊ですけども、「ア婦」だけじゃなくて、当時、一緒に運動していたリブの人やほかのグループ、私たちが行った先、参加したところでもらったピラなどを全部事務所に集めていたので、そういうものもたくさん入っています。各ファイルの内容一覧にあるような、「ア婦」や、一緒にやってきたいろんなグループのピラを見ることで、当時の風というか、息遣いが少し感じられるかなと思います。これらは「ア婦」が活動を停止したあと、飯島さんはいろんなところに引っ越すのですけれども、その時も段ボール幾つかに入れて、ずっと持ち歩いて保管してしてくれたものなのです。



飯島愛子さんは、もう亡くなったのですが、亡くなる2、3年前、お気に入りの石垣島の何とか崎灯台というのが、こちらのほうにあるのですけれども、そこのところですごくご満悦で笑っている写真です。



これが、その石垣島で住んでいた、ぼろっちい小さなうちで、このところに最後の彼氏が写っていますね。



これは、83年に別の男と奄美大島に行ってしまったのですが、その時、農業らしきものもやっていた、その写真です。

### 1.1 寄贈先との幸運な出会い

飯島さんは、2005年5月4日に亡くなったのですけれども、いま考えるとなすごくいい時期を選んだなと思うのですね。何故かという、先ほど伊田さんも話してくださいましたけれども、70年代の風をよく知っていて、「ア婦」に対して、すごく理解のある方が、教授や決定権のある地位にいらっしゃる時に亡くなったという意味で、いい時期だったなと思います。

原資料のコピーは、関東と関西と2カ所ずつ寄贈したのですけれども、それぞれのところに保存していただくについても、いろんな幸運が続きました。お手元のプリント1枚目の「資料について」というところに寄贈先を書いてありますが、その4カ所にコピー、それからヌエック（国立女性教育会館）で本体が保存されています。

お茶の水女子大学の場合には90年代にすでに米津知子さんというリブの方が、リブ新宿センター所有の資料をコピーして寄贈されていたということ。それから、ジェンダー研究センター教授の館かおるさんが、友人の紹介で2000年だったか、2001年だったかに、飯島さんと1回だけお会いになっていて、資料の話も含めて、お話をしたらしいのです。そういうご縁で引き受けてくださいました。館さんは研究室の一角を、膨大なコピーや整理のために約1年余り使わせてくださいました。

大阪府立大学の女性学研究センターと、ドーンセンター、それから、東京のアジア女性資料センターについては、「ア婦」のメンバーで、いまは「均等待遇アクション21」の酒井和子さんが、友人関係を通じて紹介してくれました。酒井さんは「ア婦」の当初からずっと女の労働の問題をやり続けていたものですから、女の資料を保存するというにすごく意義を感じていて、一生懸命探してくれました。

伊田さんのところの女性学研究センターについては、90年代に飯島さんがガラ・コスタを読んで、飯島さんの論文である『女にとって搾取とは何か』で論じたのと同じ視点が、より深く広がりをもって述べられていて、私の提起と真っすぐにつながる線が見つかった、とすごく喜んで言っていたことがあるのですけれど、それを訳したのが伊田さんです。伊田さんも学生時代に飯島論文を読んで、心を動かされたと、今回お聞きして、何か不思議

議な巡り合わせだなと思います。

ヌエックには原本を寄贈したのですけれども、その時期にちょうどヌエックが、資料を保存する女性アーカイブセンターという事業を立ち上げようとしていたので、「ア婦」の資料を受け入れますよ、と言ってくれました。現在70年以降の分（ファイル番号21まで）については、デジタルアーカイブシステムというので画像公開されていますから、ヌエックで入って、それから資料一覧で探して、「アジア婦人会議」にたどり着けば一覧表が出てきて、その場でビラを手元のパソコンで読むことができるようになっています。そういうことでは、すごくよかったなと思うのですけれども、著作権の問題で、出版されたもの、例えば雑誌に出た飯島論文や、資料集成でパンフレットにしたものなどは見られません。だから、手で読めるのは、会報やビラが殆どです。

以上の5カ所が、資料の保存について、非常に好意的に引き受けてくださったことに、とても感謝しています。

## 1.2 私のおすすめ資料

資料内容について、先ほどの内容一覧の表があるのですけれども、私が運動的な観点からお読みいただいたらいいな、と思うものを幾つかお勧めします。

### 〈会報〉

まず、資料ファイル番号1と2の会報です。お手元のピンクの表紙のプリント集にある速報No. 1（1970. 3.27）から始まります。『侵略=差別と闘うアジア婦人会議』をやりましょうと、何回か速報を出しました。大会後、月1回の会報となり、80年の12月だったかの69号で終わります。

全体会というのが月1回あっていろいろ議論したり、相談したりしたのですけれども、その報告や、論争とか、そういう運動の現場からの生の声に近いものなので、会報はすごく面白いと思います。47号からは、会員が2、3人で組になって、持ち回りで手書き原稿をつくるようになったので、「ア婦」らしさがはっきり出て面白くなったと思います。

### 〈飯島論文〉

それから、3番から12番の年代別ファイルの中からです。何年の分、何年の分というふうにビラがファイルしてあるんですが、この中には、討議資料というかたちで、飯島さんが会議に出したもの、飯島さんの著書にある論文の原型、主要論文そのままのものもありますけれど、そういうものが入っています。

その会議資料の一例としては、お手元のピンクの表紙のほうの一番最後に手書きで書いた、「今後の展望を見出すために」というタイトルで、1978年10月1日会議討論用、「アジア婦人会議の『分裂』と現状を‘70年代女解の潮流から見る」という文書があります。

ガリ刷と言っても分かりますか。若い方は分からないでしょうが、昔は、鉄筆でガリガリろう原紙に書いて、それを謄写版で刷っていました。飯島さんは、「ア婦」の前にやっていた運動で、ビラまきなどもやっていたので、書くのも刷るのもすごく早いのですよね。字は、鉄筆の筆耕講座をやるって、先生役をやったりするぐらいすごきれいで、この字がそうです。こういう字で残っていて、みんなに見ていただけるのはうれしいですね。こういうきれいな字で、刷って配っていました。

この内容には、分裂というのが75年の大会の「ア婦」の方向性を巡ってあって、最終的には77年に分かれて、それぞれの思うところの運動をやりましょうということで、最後、飯島さんや私たちと一緒にやろうということで残った人が70人。そういうかたちになったのですが、それを経て、私たちこれから何をしましょうかというときに、飯島さんが、78年まで何をしてきたかをまずまとめて、振り返りましょうということで出してくれたのです。これを読むと、「ア婦」がどんなふうにして何をやってきたか、3枚で分かる「アジア婦人会議」という感じで読んでください。

### 〈‘75年大会資料〉

あと、お勧めしようかなと思うのは、ファイル番号10の中のもので。お手元のオレンジの表紙の方に、資料集成第3分冊よりとして「運動方針」が入っています。先ほど言った運動の変わり目の年となった75年大会の資

料です。『70年以降の運動の総括』というのは、大会のレジュメと基調と一緒に配ったガリ刷のわら半紙の冊子です。それは分科会とか、例えば、「優生保護法」とか、K子さんとか、それぞれメンバーがやっていた運動が、こういうことやって、こういうことが今後の問題として残りましたという運動報告を書いたもので、運動の総括として見られると思います。

それから、同じ時に出した『戦後婦人政策年表』があります。これは45年から75年までの婦人政策、政府のほうでいろんなかたちで何とか法とかと出してきましたけれども、それと運動とを一覧表にして、すごく細かいのですけれども、網羅したものなので役立つし、参考になると思います。

### 〈集会託児〉

それからもう一つおまけは、ファイル番号20の集会託児です。いま、何か催しがあると、保育ありと書いてありますよね。そういうふうになる先鞭（せんべん）を付けたと私たちは自負しています。集会と託児ということを生懸命考えた、一生懸命考えたのは男たちだったのですけど。75年の大会は、男たちが託児をやろう、男たちにやってもらおうとか、いろんなきさつがあって、「ア婦」のもので唯一、男たちがつくったパンフレットでもあります。運動周辺の男の本音みたいなものも出てきたりで、貴重なものかなと思います。

## 2 飯島さんとの出会い

「ア婦」のことを話しに来ているのですけども、実は、私は72年から入っているの、旗揚げした70年の熱気とか、いろんなきさつとか、後からみんな聞きましたけれども、実際には経験していないのです。

飯島さんを知ったのは、72年4月30日のリブ大会の前夜祭でした。それまでに私はリブの集会には何回か行きましたが、当時、新聞やマスコミではすごくからかうように報道されていました。そういうのを新聞で見て興味を持ったのです。そういうリブの集会に行くと、美津さんやリブの人たちが言うことにそうそう、そうよという感じですがごく共感を持って、たま



たま30日の前夜祭というのもリブのビラで知って行って見たのです。

そうしたら、当日のパネラーは、影山裕子、樋口恵子、有馬真喜子、小沢遼子、飯島愛子のみなさんでした。当時、私なんか全然知らない大人ばかりで、檀上のスーツ姿の中で、白っぽいジャンパーとズボン姿で、一番冴えないのが飯島さんだったのです。終ってから、何を話したか全然覚えてないのですが、一番話しやすそうな気がしたからか、飯島さんに、「ア婦」というのはどうやったら入会できるのですかと聞いたら、「入会というのは別にないのだけでも、もうすぐ全体会があるから、オブザーバーで来てみたら」と言うのです。

### 3 「ア婦」のこと

それで何日か後に行ったら、区民会館の和室だったのですけれども、子どもたちがちよろちよろ走っていて、大人もワーワーおしゃべりしていて、会議と言われたのに何だろうと思って。そんなふうになっているのに、5月15日の沖縄返還に抗議して、デモをこういうふうにやろうという話が、最後には決まっています。結局、そこで、通信連絡費ですと言われたから、200円を払って、それで会員というか、メンバーなのですよね。当時、組織でない組織とか、運動原理も考えてつくっていたので、そういう会議のやり方とか、会員とは言わないで、要するに会報を送ってもらう人という位置付けしかなかった、役員もなくて世話人といって何人かが雑務をやっているという組織でした。

後に飯島さんと親しくなってから、飯島さんが、「私の第2幕目は38歳から始まったの」と、32歳で離婚して、それまでの激しくも苦い人生のことや、38歳というのは「ア婦」が旗揚げした年なのですけれども、そうするまでの、離婚してから6年間、自分と格闘するみたいにして考え、ずっと考えて、「そのことが70年以降の論文に凝縮したのだから」とか、「私が女の論理をつくり上げようとしたのは、男に対しての不信。つまり、どうしても許せない夫と父への恨みつらみに支えられてのことなのよ」などと言うのを聞きました。

### 〈どんなメンバー？〉

「ア婦」は10年間の間に、メンバーの入れ替わりもあるし、雰囲気も時期によっては違っていくのですが、年齢層はリブより、はるかに高い。高いというのは、日本婦人会議という、社会党系の婦人組織の当時の在り方に非常に批判的だった方たちが、飯島さんや松岡洋子さんたちと出てきて、新しい婦人運動を創ろうと始めたからです。70代までの年長者もいらっしやいました。若い層というと、全共闘や反戦系の労働運動、リブ運動に触発された20代、30代の人たちでした。学生は少なく、飯島さんを招いて勉強会をして、それから「ア婦」に入ってきてという学生も増えましたけれど、始めはほとんど労働者でした。

### 〈セクトとノンセクト〉

さっきの全体会のように、多数決でものを決めないということをやっているものですから、党派やセクトといっても、いまの方分かりますかね。始めから新左翼系の党派が、「ア婦」ができたときに、自分たちがそこを乗っ取ってといったらあれですけども、「ア婦」を自分たちの党派のような革命までやる組織にしようとして介入してきました。

70年から72、73年ぐらいまで、中ではしょっちゅう党派の人と私たち、党派の人みたいに信じるころがあつて、はっきりものを言って、何々に命を懸けるみたいなことを言えないようなノンセクトの人たちとの論争がものすごくあつて、それに年長の方たちが、あなたたち、何を言っているのだみたいに、長い間仕事をしてきて、活動をしてきてという、重い発言でもって、若いほうをたしなめるとか、そういうような雰囲気もありました。ともかく、何でも延々と議論をするし、議論してもなお決まらないということもしょっちゅうありました。

事務所は、75年までは銀座の外れの新橋駅近くの松岡事務所に置いていたので、会議の後はそのまま新橋のほうの飲み屋で、まじめなことも、ふまじめなこともいっぱいしゃべって、みんな、次の日に仕事に行くのだけれども、遅くまで平気でそういうことをやっていて、私も会議が楽しみなのだか、飲むのが楽しみなのだかよく分かんないというふうで、若かった

から平気でやっていました。

### 〈「ア婦」のデモ〉

そんなふうにしていって、72年ぐらいから、73、74年ぐらいまでは、よくデモやビラまきに行きました。



これは、76年11月ですけれども、天皇在位50年、私たちは在位50年なんか祝わないぞということで、反天皇といたらすぐ立派だけれども、ともかく天皇制なんて嫌だということでデモをしました。

いつのデモでもこのような感じで、プラカードを勝手に自分たちでつくって、「ア婦」の旗は、オレンジ色だったか、色を忘れちゃったけど、バラバラした生地に墨で手書きで、「侵略=差別と闘うアジア婦人会議」と書いたものでした。そういう子連れでも、5人でも30人でも、ともかく行こうといった人が、その旗を持っていくみたいにして、旗の後についてテレテレ歩いて、それが私たちがやっていた「ア婦」のデモでした。

### 〈理念の具体化〉

そうやって出掛けていく運動というのには限界があって、もっと自分の

地についたところに闘いの場所を具体的につくっていきなさいけないのじゃないかというのが、75年の方針でした。実際に、幾つかの地域会議、南部とか、北部とか、千葉などを始めました。また職場では、自分もなったり、ほかの人を支援したりで、職業病闘争をしたり、それぞれに具体的なかたちをつくっていくようになりました。

そのころちょうど三里塚の若い農家の人たちが無農薬野菜をつくり始めました。ももとは支援ということで現地闘争に行っていて、行っているうちに耕すというのはどういうことか経験してみたいとか、「ア婦」は割合経験主義というか、やってみないと分からないという人が多くて。そうして、畑を手伝っているうちに共同購入しようという話になって、あちこちで共同購入を始めました。

私たちは、同じ私鉄沿線でメンバーが何人かいたのですけれども、その人たちで、飯島さんちの近くの家にざっと4千枚ぐらいビラ入れをして、農家から野菜を持ってきてもらい朝市をしてなどの準備をして、近所の人も交えて共同購入をするようになりました。会報の最終号の69号は、産直、共同購入の特集を出しました。

それから35年経っているのですけれど、いまでも飛行機のすごい轟音の真下の畑、成田空港のフェンスで取り囲まれた農地から毎週野菜や、卵が届いています。畑は、前は本当に緑の広い大地だったのですけれども、フェンスで今は何も見えません。

### 〈「ア婦」は何を残したか〉

「ア婦」が何を残したかということ、70年の大会で女性解放の新しい理念を提起したというのは確かなのですけれども、そのほかに何を残したかなということ、「勤労婦人福祉法」、「育児休業法」、「男女雇用機会均等法」、「労基法」改悪など、次々繰り出される婦人政策を貫いている質、つまり、私たちはよくこう言ったのですけれども、より巧妙に女を差別、分断していくものなのだと反対もしたのですけれども、結局どれも法律としては成立してしまいました。

「均等法」の前段が「男女雇用平等法」ですけども、それが論議され始

めた79年ぐらいは、いろんなかたちで女性解放という考えも違ってきて、分岐が始まっていました。「ア婦」は、「いまの男並みに平等に搾取されるのはごめんだ」という前段が、私たちの言っていたことには必ず付いているのですけれども、そういう前段はあまり伝わらなくて、「ア婦」は平等も要らないだって！、とあきれられた、そういう経緯もありました。

成立してしまったといっても、法律というのは法律ですから、実体化させないような運動が必要なのですけれども、そういう大きな運動はもう作れませんでした。「ア婦」は、ずっと女にとっての労働ということを大きな柱にしてきたので、それができなかったというのはすごく無念の思いですし、「ア婦」の力の無さにほかなりません。

ですけど、先ほど資料のところで言いました、酒井さんみたいに、ずっと自分がやってきた運動の延長をいまもやっていたりとか、「アジアの女性たちの会」を立ち上げたのは、「ア婦」でキーセン観光反対を一緒にやっていた人ですし、それから、いまも「従軍慰安婦」の問題をやっている人とか、辺野古の海を守る闘いをやっている人もいます。いろんな場所で、「ア婦」が掲げた理念を具体化しようと、それぞれがそのことは手放さないで生きてきたかなと思います。

#### 4 飯島さんはこんなひと

80年代に、女性学が始まり、フェミニズムと発展していくのですが、飯島さんは最初のころは冷淡なふうを装っていたのか、冷淡だったのか分からないのですが、あちこち引っ越したら、必ずその図書館にどんどんリクエストして、すごくいっぱい本を読んでいた。私たちにも、例えば、先ほどのように、ダラ・コスタを読めなど手紙もくれました。私たちは好きな男と好きなところに行って、海でも潜っているのねと、うらやましく思っていたのですけれども、それだけではなかったみたいです。



さっきの石垣島の小さなうちの中、これは書斎の飯島さんです。小さなうちの一角の、2畳もないくらいをカーテンで仕切った書斎です。本はたくさんありますよね。自分の本じゃないのもいっぱいあるかもしれないけれども、とにかく本に囲まれて。あの机は、昔、東京にいたときも使っていた、こんなになっちゃうような低い文机（ふみづくえ）というか、昔風の塗りのような机ですけど、あれでずっとやっていたのでしょうか。

で、飯島さんというのは勉強家ですけども、けっこうミーハーで、面白がりで、好奇心旺盛で、一言で言うと、これは婦人民主クラブの飯島さんよりは先輩の方がおっしゃったんですけども、「飯島さんというのは、わがままだけど、どこか可愛げがあって、憎めない人だったわね」と。そんな人でした。

書くのはすごくちゃんとしたものなのに、何かを言われて即座に反論す

るというのは苦手らしくて、甘ったれ声で、ウニャウニャ言っているから余計攻撃されたりとか、周りの人がこりゃ大変だ、何か力になってやらなきゃと思って、結局手伝わされる。人使いがうまいと言うんですかね、あれも。ともかく、人をうまく使って、私も使われました。

そういう人でしたから、最後の4カ月余り、昔、野菜の共同購入をしていた住まいと同じ私鉄沿線の病院で入院していたのですけれども、ほとんど毎日のように、「ア婦」だけじゃなくて、いろいろな人たちがやってきて、楽しくおしゃべりして、にぎやかにしていて、主治医の先生も「お友達が多いですね」とびっくりしていました。

亡くなって初めて、そういう人だったのを知ったそうですが、石垣島で仲良くしていた方と、その方の8歳の女の子は、「愛ちゃん、早くよくなってね」としよっちゅう励ましの手紙をくれていました。

70年代に同じ風の中で闘って、放蕩（ほうとう）息子の帰還みたいに戻ってきて、また一緒に笑って、最後は自分の行きたいところに資料が届くようにしっかり仕事も残して、飯島さんらしい何幕目かの終わり方でした。





これがさっき言っていた平久保崎灯台とって、これのずっと向こうの海に散骨してねと言っていたらしいです。5月4日に亡くなって、6月19日に石垣の友人たちが船を出してくださって、散骨しました。石垣までいられなかったお姉さまは、後日

「まきし骨さんごに混ざり月の夜は石垣島の岸に寄るらむ」と短歌を寄せてくださいました。

今日、私がここに来ることになって、昔のメンバーに、「ア婦」というのは何だったのかといろいろ聞いたり、前に何人かに聞いたことを読みますね。



## 5 メンバーからみた「ア婦」

Aさん。自分が夢を持って目指そうとしていたところ、男並みを目指してまで選んで頑張っていたところにある、厳然とした女性差別に打ちのめされた女たちがつくった運動体。愛する男にも全共闘にも漏れなく付いてきた女性差別。「ア婦」はその痛みから気付いた、見えた、差別と闘う運動だったと思う。

Bさん。「ア婦」は、みんながそれぞれ自分にとって切実なものと闘って手いっぱいだった。何か歴史に残そうなんて考えもしていなかった。そういう女たちの集合体だったから、全体としてどういう思想をなしていたかとかは、当時は飯島さんぐらいしか認識できていなかったかもしれない。

Cさん。教師だったから、育休反対を夢中でやったけど、とことん一つのことをやりきると、全部のものが見えるのだと分かって、その後の教師としての私の姿勢を決めた。

Dさん。男の生産性の論理じゃ女は生きられない、女同士の分断には手を貸さない。そういう女たちの集まり。「ア婦」の分裂後に残ったグズ連(?)が私たちだったよね。

Eさん。「ア婦」は、人生のベースキャンプみたいなもの。山の登り方が分からない私に、指針や栄養を与えてくれ、登って駄目だったら戻り、また自信を与えてくれたところ。愛子さんは出会わなかったら、いまの私はいないくらい影響を受けた人。ねばならない式の考えに陥りやすい私を救ってくれたし、いまでもその存在は大きい。Eさんは終わりごろの「ア婦」に入った、共同購入仲間。飯島さんは玄米食をやっていたので、入院してからの食事やヨガの先生として、体のいろんなケアをしてくれました。

Fさん。「平等法」のとき、「ア婦」は男並みでなく、男こそ働き方を変えるべきと主張したけど、政策も企業の働かせ方も変わるどころか、いまや男も女並みにひどくなってきた。「ア婦」に変える力はなかったしね。でも、個々の生き方は、「ア婦」で変わったと思う。もしかしたら、草食系男子の出現は、70年代の女の運動と、どこかでつながっているかも。Fさんは、九州で有機農業生産者となり、30年近くになります。

Gさん。「ア婦」であったことが、自分の人生を自分で決めて捨てない姿勢につながっている。女性差別はもう無いと思って、「自己責任」と言ってしまうもの分かりのよい若い人たちに、「自己実現し難いのはなぜか」と、社会の構造に目を向けて欲しい。Gさんは夫婦別姓を続けて、子どもが成人した今も公務員として、生活保護の現場で働いています。

ということで、歴史の古老としての思い出話を聞いてくださってありがとうございました。